星を救え～４人の戦士と１人の王子～

ガラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
星を救え～４人の戦士と１人の王子～

【Ｎコード】
Ｎ４６２６Ｉ

【作者名】
ガラン

【あらすじ】
人類は争いを続けてきた。いつの時代でも争いは絶えない。
しかし悪の支配による大きな変化をむかえようとしている。
戦士達にすべてはゆだねられた。

第1話：騎士団長アラン登場（前書き）

初めて書いたので微妙ですが読んでください！！

第1話：騎士団長アラン登場

ここはとても栄えている王国ナイトランド。
王の名はランド、王の娘である姫の名はチャキー。
そんな国でも悪人というものはいくらでもいる。

「おいおい、ねぇーちゃん！金目のもん全部置いてきな。ひゃっひゃっ。」
「兄貴に逆らって生きたやつはいないぜぇ。」
「そ、そうだぞぉ。言うこと聞くんだなぁ。」
こんな非道な事をしているのは城下ではちょっと有名な悪徳三兄弟
バル、ベル、ドルだ。
こうやって街の人々を困らせる。
街の兵隊も彼らには頭があがらない。
そんなときだった。

「おい、お前達！この国でそんなことをやっていいと思っているのか？」

三兄弟は驚き、その声の方を向く。
そこには、立派で頑丈そうな鎧を身に付け両手にトマホークを持った男がたっていた。
明らかに街の兵隊ではない。

バル
「なんだ？ケンカ売ってんのかお前は！？」
バルは少し驚きながらもそう言った。なんだか少し声が震えている。

そんなバルに対して、
「だったらどうする？」
冷静な口調の男。
ベル
「あ、兄貴。あいつはなんだかヤバイっすよ。ここは逃げましょ！」
ベルは完全に怖じ気づいている。
だがバルは焦りながらも男に斬りかかる。
サッ。男は軽々とバルの攻撃をかわした。
そして、
「やれやれ。どうなってもしらないぞ。」
と言うとヘルムを閉じた。その瞬間、ドカッ！！
バルはその場に倒れこみうなっている。
さっきまで目の前にいた男はいつの間にか後ろにいた。
「我はナイトランド王国騎士団長アラン！この国で悪事をする者は我がすべて成敗する！」
男の正体は国で一番の実力をもつ騎士団長のアランだった。
その名を聞いた三兄弟は驚きすぐに逃げ出した。
アラン
「逃げ足だけは速いな。さて、今日は城へ戻ろう。」アランは任務を終え城へ戻るのであった。

その頃某惑星。
「ついにこの時がきた。因縁の戦いは我々の勝利によって終わるのだぁ！！」

一体何が起こるのか？
アランの戦いは始まったばかりだ。

第1話：騎士団長アラン登場（後書き）

なんかぐだぐだ……。

アラン
「まぁまぁ。頑張ってくれ。」

わかっとるわぁ！！

とにかく頑張って次回も書きます。

第2話：襲撃（前書き）

第2話できました。

第2話：襲撃

無事に任務を終え城へと帰還したガラン。
ナイトランド城は世界でも一番と言っても過言でないくらいの大きさと設備があり難攻不落の城として有名だ。
またナイトランドの騎士団は世界でもトップレベルの騎士ばかりを集めている。その騎士団長なのだからアランの実力はかなりのものだ。
門の前には副団長であるリックが立っていた。
リックはアランの古くからの親友でアランが一番信頼をしている人物だ。
アラン
「リック、城の護衛ご苦労。街では三兄弟が好き勝手やっているみたいだ。」
リック
「まったく、奴らもこりないなぁ。アランも任務ご苦労だったな。早く王に報告に行け。それにチャキー姫もお前の帰りを待ってるぞ？」
「お、おい！姫のことは言うな！！」
「はっはっは！！わかりやすいなお前は。」
「う、うるさい！お前は一生門と過ごしていろ！！」

アランは顔を赤くし早足で城へと入っていった。
実はアランはチャキー姫に惚れているのだ。そして姫もアランに惚れている。つまりは両想いということだ。

アラン
「ランド王、只今帰還しました。」
王

「任務ご苦労。近頃我が国だけでなく世界で物騒なことが起きている。今日も騎士団の1人が何者かに襲われ負傷した。アランよ、どうか気をつけてくれ。」
「はっ！」

報告を終え部屋へと帰るアラン。そこには姫の姿があった。
アラン
「姫！？部屋に来てはいけないと言ったではないですか！」
チャキー
「ごめんなさいアラン。でも二人きりのときはチャキーで良いと言ったでしょ？」
「す、すまないチャキー。」
「ふふふ、気にしないで。そんなことよりアラン、絶対に無事でいてね。あなたになにかあったらわたしは……。」

二人はその夜お互いの想いを伝え合った。

翌朝。今日もアランは任務へと出掛けた。しかし今日は珍しく街は静かだった。アランはこの様子をおかしく思いすぐさま城へもどった。
城へ着いたアランの目に映ったのは無惨にも殺されている騎士団の兵たち。
そのとき門の方から何か聞こえた。
「ア……ラン。アラン……！」
その声の主は傷だらけになったリックだった。
「リック！しっかりしろ！！なにがあったんだ！？」
「わからない。アラン、ここは危険だ！早く逃げろ！！」
「そんなこと出来るか！！」「オレはもうダメだ…。アラン、オレはずっと友であるお前に憧れていたんだ。お前と歩んできたオレの人生に悔いはない。アラン！国をたの……ん…だ。」

「リックーーーーッ！」

リックは死んだ。自分の思いをアランに託して。
だれよりも信頼していた友を無くしたアランは悲しんだ。しかし、友の頼みを思い出す。そして王のもとへ急いだ。
王室に居たのは王とチャキーを担いだ大男とそのよこには黒いフードを被った謎の女。

アラン
「待て！！王とチャキーを離せ！よくも城を！他の兵はどこで暴れている！？」

謎の女
「他の兵？なに言ってるの？私達以外に兵なんていないわ。」
まさかと思った。
城はたった二人によって襲撃させれていたのだ。
「私の名前はエメラダ。アンモニウム星から来たの。世界征服のためにね。あなたがアランね？ぜひとも力を見せてほしいけど今日はこの二人をつれさるだけだから♪それじゃあ、また会いましょ。バァ～イ♪」

女と大男は一瞬でその場からいなくなった。

アラン
「くそーーー！！！！オレはなにひとつまもれないのか！？」

自分を責めるアラン。
そのとき、アランの目の前に何者かが現れた。
「アラン様。チャンボ星の王子チャンボの命令によりあなたをお迎えにあがりました。」
男がそういうと、アランは気を失った。そして、アランは一時の安

息を得た。

第2話：襲撃（後書き）

一気に大変なことになりましたね。
アランはこれからどうなるのか？
アンモニウム星、チャンボ星の関係はなどなどいろいろ期待していてください！！

第3話：チャンボ星（前書き）

ついに第3話！！

第3話：チャンボ星

「アラン……。起きて？いつまで寝ているの？」
アランは目を覚ました。
チャキー姫の声がしたと思ったが近くにチャキーがいるはずがない。
アランは自分の無力さを実感していた。
すると、目の前に男が現れた。
「アラン様、目が覚めたようですね。」
この男は城に現れたあの男だ。
アラン
「お前は一体何者なんだ！？まさか！あのエメラダとかいう女の仲間か！？よくもチャキーと王をさらったな！返せ！！」
「残念ですが私はそのような方の仲間ではありません。いきなり連れてきてしまい申し訳ありません。緊急事態なのでああするしか。」
「そうだったのか、まぁいい。ところで、ここはどこなんだ？」
「ここはチャンボ星です。あなたがいたガイア星とはまた別の星です。」
「チャンボ星だって！？噂には聞いていたが本当に存在していたとは！しかし、惑星間を移動するなんて可能なのか？」
「チャンボ星には優秀な魔術師がたくさん居ますからら、惑星間移動は簡単なことですよ。」
アランは何がなんだかさっぱりだった。
いきなり別の惑星に連れてこられたのだから仕方がない。
「王子があなたに会いたがっていますので、ついてきていただけますか？」
アランはとりあえずついていく事にした。
チャンボ星の人々はみなド派手な服をきていて街並みはとてもにぎやかだった。
何分か歩くと目の前にはとてつもなく巨大な城が見えてきた。

「あれがチャンボ城です。私は報告がありますので先に行きます。アラン様はゆっくりと来てください。」そう言うと、使いの男は行ってしまった。

しばらく歩くと大きな城門があった。
そこには無精髭を生やし、2メートル以上はある大斧を軽々持っている男がいる。間違いなく門番だろう。
アランが門を通ろうとした瞬間、
「なんだぁ、てめぇは！？見慣れねぇ顔だな。まさか！！てめぇ侵入者だな！？！？正面からくるたぁいい度胸じゃねぇか！ぶっ飛ばしてやる！」
そうゆうと、男はアランにいきなり殴りかかってきた。
アランは驚きながらも攻撃をよける。
アラン
「お、お前！！いきなりなんだ！？我が名は……」
「ガタガタ言ってんじゃねぇ！」
今度は大斧を振り回して向かってくる。
アランは必死によけたが斧の風圧が凄まじく後ろに倒れてしまった。
「俺様の名はアレックス！この城の門番だ！そしてこの斧が睦月！俺様の相棒よぉ。」
アラン
「斧に名前をつけてるのか！？」
アランは少し動揺しながらも立ち上がり戦闘体勢に入った。
アラン
「仕方がない、お前みたいなバカは体で気付かせないとダメみたいだな。いくぞ！手加減なしだ！！」
アレックス
「ば、ばかだとぉ！？てめぇ、よくも俺様を！！」
アランのダブルトマホークとアレックスの大斧が激しくぶつかり合う。

アレックスの馬鹿力でアランは吹き飛ばされたがダメージは全くない。
アラン
「力だけでは我には勝てない。我が奥義を見せてやろう！！」
そう言うと、アランはヘルムを閉じ一気に走り出す。そして、アレックスの目の前で高く飛び上がった。
太陽の光とアランが重なり姿が見えなくなる。
次の瞬間、
「十文字斬り！！！！」
いつの間にか、アレックスの背後に周りこみ、そこから十文字の斬撃を繰り出す。
「な、何！？」
アレックスは寸前でその猛攻を防ぐ。
しかし、斧にはくっきりと十文字の痕が残っている。「俺様の睦月に傷をつけたのはてめぇが初めてだ！なかなかやるみてぇだな！！」
「お前もやるな。我が奥義を防ぐとは。」
「俺様の実力はこんなもんじゃねぇぞ！？くらいな！グランド……
……」

ドサッ！

なぜかアレックスはその場に倒れてしまった。
どうやら酒を飲んで酔っていたらしい。
大きないびきをたてて寝ている。
「一体なんだったんだこいつは？とにかく王子とやらに会わなくては。」
アランはアレックスをその場に残し先を急いだ。

城の中を歩いていると後ろからアレックスが走ってきた。
「さっきは悪かったな。おめぇがアランとは思わなくてよぉ！！王

子なら玉座の間だ。一緒に行くぞ。」
アランは内心なぜ命令されなければいけない！？と思いつつもアレックスの後についていった。

玉座の間に着くとアレックスが、
「チャンボ王子。アランを連れて参りました。」
と言った。

すると、目の前の垂れ幕の中から人が、パンプキンズボンをはき、足のかかとをぴったりとくっ付けながら、ぴょんぴょんと階段を降りてきた。手にはオモチャのようなステッキを握りしめている。
「やぁ♪僕がチャンボ星の王子チャンボだっ♪よろしくねっ！」
アラン
「こ、こいつが王子！？！？」アランにはこの人物が王子だなんて信じられなかったし、信じたくもなかった。
チャンボ
「君にこの星に来てもらった理由はただ1つだっ♪僕と一緒にこの星や君たちの星を守ってほしい。」

アランはどうしたらいいのかわからなかった。
そんなアランにチャンボは今までの出来事や経緯ついて話し出すのであった。

第3話：チャンボ星（後書き）

いきなり濃いキャラが2人も出ましたね！
アレックス
「濃いキャラだとぉ！？王子こいつぶっ飛ばしていいですか！？！？」
チャンボ
「いいよっ♪」
か、軽っ！！！！
てかアレックス酒臭い！
とりあえず逃げます！！
さらば！

第４話：すべての始まり（前書き）

完成でぇす。

第４話：すべての始まり

チャンボ
「なぜこんなことが起きているのか教えてあげるよ。すべての始まりは僕がまだ小さいときだったんだ。」

そのころはチャンボ星とアンモニウム星は同盟を組んでいた。チャンボ星の王はジャンボ王、アンモニウム星の王はアンモニウム大魔王だ。
しかしある時アンモニウム大魔王がガイア星を征服しようと話してきた。もちろんチャンボ星はその話に反対した。
その日以来両星の仲は最悪のものとなり同盟も決裂した。
そんなある日。

ジャンボ王
「チャンボよ。お前はいずれこの星を担うことになる。どんな時も自分の想いを貫き強き王となれよ。」
チャンボ
「はい！父上！」
いつものように話をしていたふたり。
その時、
アレックス
「王！！大変です！アンモニウム大魔王が魔物の大群を引き連れ我が星に攻めてきています。城に到達するのも時間のうちかと！」
「ついに来たかアンモニウムよ。しかし引くわけにはいかん！兵を集めろ！！迎え撃つぞ！」
「はっ！」

アンモニウム大魔王はあっという間にチャンボ城に攻め入ってきた。

魔物達の大群にチャンボ星の兵達は抵抗するも次々に倒されていった。
アレックス
「王！！アンモニウム大魔王がすぐそこまで来ています！お逃げください！」
「王たる者自分の星を守らんでどうする？こうなったのも私の責任だ。戦わせてくれ！それよりもアレックスよ。お前の力を信じて頼みがある。チャンボをつれて逃げてくれ。最後の命令だ。」
「王…。わかりました。しかし王！必ず生きてください！！」
「全く。無理なことを言うな。チャンボを頼んだぞ。」
チャンボ
「父上を一人にしてなんて嫌です！僕も戦います！！」「馬鹿者！お前以外に誰がこれからの星を守るのだ？私の全てをお前に託したぞ。」
「嫌だっ！」
ガサッ。
「は、離せアレックス！！僕は父上と…。」
アレックス
「……」
アレックスは無言でチャンボを担ぎ上げ城から出ていった。
ジャンボ
「チャンボ、アレックス。お前達は私の大切な…。」「ガッハッハッ。感動のお別れはすんだのかジャンボ？この星も大した力はないな！残るはお前だけだぁ！捻り潰してやるわぁ。」
「いいだろう。勝負だアンモニウムよ！チャンボ血族に伝わる居合にてお前の相手をしてやる。」
「面白い！！かかってこい！」
「斬る！」
ジャンボが一歩踏み込んだ瞬間アンモニウムの体に傷がつく。
アンモニウムがその痛みを感じないうちに違う傷が次々に切り刻ま

れていく。
「な、なに！？」
「これで決める！
居合流奥義、三の太刀！」
「一つ！」
「二つ！」
「くらえ！三つ！！！！」
「ば、ばかなぁ！？」
ジャンボの連撃にアンモニウムは成すすべもなく倒れ込んだ。
しかし……。
「ガハハ……、ハハハハ……！ガッハッハッハ！！面白い。面白いぞジャンボよ！！」
「な、なんてことだ！？私の居合では倒せないのか！？」「ジャンボ！全てを終わらせてやるわぁ！！」
アンモニウムの体がどす黒いオーラに包まれたとたんアンモニウムの体は今までの三倍ほどの巨体になっていた。
「死ねぇジャンボ！
デーモンスマッシャー！」「ぐ、ぐはっ！？」
ジャンボはその一撃に耐えることはできなかった。
「さらばだ。チャンボよ。」
「ガッハッハッハ！ジャンボ王破れたりぃ！！！！」

チャンボ
「こうして、アンモニウム大魔王の銀河征服が始まったんだ。」
アレックス
「あれから、１０年が経った。チャンボ王子はホントに成長されたんだ。」

「父上の死を僕は絶対無駄にしない。だから、アラン。君にも力を貸してほしいんだ。」
アラン
「そんな過去があったのか。ならば、エメラダというあの女は？」
「そのとおりだよ。君の国の王とチャキー姫をさらったのは死霊使いのエメラダ。アンモニウム大魔王幹部の一人さ。」
「ならば断る理由はない。奴らには制裁をくわえないとな！それにこんな酔っ払いバカだけでは安心できんからな。」
「酔っ払いバカだと！？アランてめぇ！やっぱり気に食わねぇ！」
「またやる気なのか？いいだろう。結果は見えているがな！」
「ハッハッハ、愉快愉快。楽しい旅になりそうだね♪」

こうして全ての星を巻き込んだ戦いの旅が始まった。

その頃、アンモニウム星では、
チャキー
「アラン、あなたに会いたいわ。助けて。」
監視員
「おーい！ガラン。交代の時間だぞ！？」
ガラン
「わかってるよ！！」
「あなたはガランと言うの？アンモニウム星の魔族にはあなたみたいに人と変わりない外見の方もいるのね。」
「ま、まぁそうだなぁ。
……馴れ馴れしい女だな、そんなことより、アンモニウム大魔王のやり方は本当に卑劣だ。こんなことオレはもうやりたくない。他の星に逃げ出してやる。絶対に！」

アンモニウム星に裏切りの種がひとつ。

彼もまた戦士となる。

第４話：すべての始まり（後書き）

今回は回想シーンでした。次回はキャラ紹介します。アレックス
「かっこよく書いてくれよ！？」
アラン
「お前はただの酔っ払いバカだ！！」
アレックス
「なんだとぉ！？てめぇ！！」
皆さんケンカはやめましょう。

キャラ紹介１

今回はキャラ紹介です！！
アラン
「もちろん我が一番だ！」
名前：アラン
性別：男
種族：人間
タイプ：光
年齢：２３
身長：１８０
武器：ダブルトマホーク
奥義：十文字斬りなど
ナイトランド王国の騎士団長で物語の主人公的存在。アンモニウムの襲撃によって友であるリックを失った。その際に王とチャキー姫を連れ去られ敵討ちと救出の為にチャンボ達と行動を共にする。
戦闘スタイルはダブルトマホークによる斬撃で光の如く敵を斬る姿から「閃光のアラン」と呼ばれている。複数の敵との戦いはあまり得意でないが一対一の戦いでは負けを知らない。
アラン
「なかなか良くできてるじゃないか！見直したぞ。」ありがたきお言葉！！
アランはかっこいい！

アレックス
「早く俺様の紹介しろ！」はいはい。
名前：アレックス
性別：男
種族：ドワーフ

タイプ：土
年齢：２８
身長：１６７
武器：大斧（睦月）
奥義：グランドインパクトドワーフの村に産まれ幼少時代から武術を学んだ。１０歳のときジャンボ王に気に入られ、以後護衛を任されてきた。アンモニウムの襲撃によって慕っていたジャンボ王を失いそれから、酒に溺れていった。
しかし、ジャンボ王との約束であるチャンボの護衛はきちんとやっている。
戦闘スタイルは主に大斧での攻撃だがあらゆる武術をマスターしているため格闘では最強かもしれない。斧で全てを薙ぎ払う姿から「山崩しのアレックス」と呼ばれている。
アランとは犬猿の仲で喧嘩ばかりしている。
アレックス
「俺様が最強なんだよぉ！アランなんか弱いぜ。」
負けず嫌いなのね。
チャンボ
「次は僕だね♪紹介よろしく！」
名前：チャンボ
性別：男
種族：チャンボ星人
タイプ：全属性
年齢：１８
身長：１６０
武器：マジカルステッキ
奥義：召喚術
チャンボ星の王子で物語の鍵を握る人物。
アンモニウムの襲撃で父を失ったが決して落ち込むことなく銀河を救うことを目指している。

見た感じはふざけた人。
戦闘スタイルは魔法による援護だが召喚術も得意。また、マジカルステッキにはある秘密があるらしい。それはお楽しみに！！
チャンボ
「なんだか僕の紹介短いなぁ！」
謎多き人物なんで……。
今回はこの3人です。
みんなアンモニウム何らかの関わりがあるんですね。想いは人を呼び寄せます。これからも、仲間は増えていきます。それは敵においても同じことです。
チャンボ達は銀河を救えるのか！期待していてください。

第5話：旅立ち（前書き）

遅くなりました。第5話です！！

第5話：旅立ち

アラン
「話はある程度わかったがまず何から始める？」
チャンボ
「そうだね。まずは君の星、ガイア星に行こう♪いくらなんでも3人だけではアンモニウムは倒せないからね。新たな仲間を探すんだ！！」
アラン
「なるほど。しかし、誰かあてはあるのか？」
アレックス
「心配いらねぇ！調査済みだ！盗賊ギルドってやつがあるのは知ってるな？そこのボスをやってる奴がいるんだ。」
アラン
「独眼のウルフか…。」
アレックス
「知ってるなら話は早いぜ！！そいつを仲間にするって訳よ！」
アラン
「……そううまくいくのだろうか…。」

そんな訳でアラン達はガイア星に旅立つことになったのだ。
アレックス
「チャンボ王子！！変装をお願いします！あなたを危険な目にあわせたくねぇんです！」
チャンボ
「わかってるよ♪すまないねアラン。ちょっと待っててていてくれ♪」
アラン
「確かにその格好では目立つだろう…。是非着替えてくれ。」

そして、ついに旅立つ時が来た。
アレックス
「ガイア星かぁ！何年ぶりだぁ！？」
チャンボ
「アラン！惑星間移動は慣れないとちょっと辛いけど我慢してね♪」

すると、３人の体はまぶしい光に包まれた。
あの時と同じ光に…。

それから何分も経たない内にアラン達はガイア星に着いてしまった。
アラン
「ハァハァ…。」
アレックス
「なんだぁ？おめぇこんなことでバテてんのか！？頼りねぇなぁ！！」
アラン
「う、うるさい！！我がこんなことでバテる訳がないだろう！」
アレックス
「なんだとぉ！？やるかぁ！？！？」
またしても喧嘩が始まってしまった。
チャンボ
「２人とも！喧嘩はいいんだけど、とりあえず宿を探さないかい？」

そして、やっとその日の終わりを迎えることが出来たのだった。

だが、３人が寝静まったころ怪しげな影が３つ。
「兄貴、こいつらのんきに寝てますぜ…。」
「よし、この大斧を頂いていくぞ…。」

「お、重くて一人じゃ持てないんだなぁ。」
「頼りねぇなぁ、3人で運ぶぞ…。」

翌朝。
アレックス
「ヌォ〜〜〜〜〜〜〜!!!!!」アラン
「うるさいぞバカ！朝から何なんだ！？」
アレックス
「俺様の睦月がなくなってんだよぉ！」
アラン
「あの大斧か？あんなにでかくて邪魔な武器ないほうがいいだろう。そんなに気にすることでは……。」
アレックス
「アラン！てめぇ！！」

ドカッ！！

アランはアレックスに殴り飛ばされた。
あんなに本気で殴られたのは初めてだ。
アランが顔を上げるとアレックスの姿はなく、代わりにチャンボが立っていた。チャンボ
「すまないねアラン。でもアレックスを許してやってくれないかい？睦月はね、アレックスが僕の父上から受け取った物なんだ。あの斧は仲間殺しの斧と呼ばれていて使う者が未熟だと仲間まで傷付けてしまう危険な武器なんだ。それでも、父上はアレックスの力を信じて睦月を渡した。だからあの斧はアレックスにとってとても大切な物なんだよ。」

アランは無言で宿から出ていった。
アレックスの後を追って…。

アレックス
「ちくしょう！！俺様の睦月を盗むなんてふざけやがって！！盗賊ギルドの連中を片っ端からぶん殴ってやる！！」
アレックスは盗賊ギルドに向かいギルドにいた盗賊を一人残らず殴り飛ばした。だが睦月は見つからない。アレックスはさらにギルドの中を進んでいく。
その時！！
グォアーー！！
地響きと共に野獣の鳴き声がした。姿を現したのは3つの頭を持ったケロベロスだった。
アレックス
「大層なお出迎えだな！だがオレはてめぇに用はないんだよ！！」
格闘が得意なアレックスは一気に間合いを詰める。
「くらいな！！地砕撃！」
アレックスの重い一撃がケロベロスの頭に直撃する。だが、ケロベロスは何もなかったかのようにしている。
アレックスが唖然としているとケロベロスはアレックスを押し倒した。
「く、くそ！動けねぇ！！」ケロベロスの鋭い牙がアレックスに襲いかかる。
「睦月がなきゃこんなもんか…。ジャンボ王許してください、オレはもう……」

「シャイニングカッター！！」

どこからか飛んできた十文字の衝撃波がケロベロスに直撃する。
「犬一匹に苦戦するとは大したことないな！」
「ア、アラン！？」
その攻撃はアランのものだった。

アラン
「さっきはすまなかった。何も知らずに…。」
アレックス
「話は後だ！！今はこのむかつく犬っころをぶん殴る！！」
アラン
「そうだな。やるぞ！
我が奴をひきつける！！お前はその隙をつけ！！」
アランは閃光のような速さでケロベロスをひきつける。
アレックス
「さっきのお返しだ！！地砕翔！！」
アレックスの強烈なアッパーでケロベロスが打ち上がる。
その先にはアランが待っていた。
アラン
「犬は大人しく小屋にいるんだな。十文字斬り・烈！」
ケロベロスはアランの一撃で急降下していく。
「アレックス！受け取れ！」
アランはトマホークのひとつをアレックスに投げ渡した。
アラン
「遅れるなよ！！」
アレックス
「てめぇこそな！」
アラン&アレックス
「グランドクロス！！」
2人が十文字に交わりケロベロスを斬りつける。
「ガルー……。」
ケロベロスは力尽きた。
アラン
「なかなかやるな酔っぱらいバカ。」
アレックス
「てめぇは一言多いんだよ！！」

アラン
「うるさい！我は本当のことを……ぐっ！」
アレックス
「おい！？どうした！！アラン！」

「ふっふっふ。戦場で気を抜くとは未熟だな。」
アレックス
「てめぇは！？」

「オレは独眼のウルフ。ギルドのボスだ。」
ウルフは左目に眼帯をしていて片手にはナイフを持っている。
ウルフ
「そいつはオレのポイズンブレスを浴びたんだ。次は貴様の番だ！！」
アレックス
「アランは俺様の仲間だ！！その仲間を傷つけたてめぇは許さねぇ！！」
こうして、激しい戦いが始まった。

その頃、
ガラン
「な、なんとかガイア星にたどり着いたみたいだ…。追っ手はもういないな…少し疲れちまった。どこかに里はないのか……？」
謎の男ガランは一体どうなってしまうのか。

第5話：旅立ち（後書き）

アレックスの戦い書ききんなかった……。

アレックス

「次回も俺様が大活躍だぜぇ！！」

アラン

「ど、毒がぁ…助けてくれぇ…」

アレックスアラン助けてやってよ！！

次回お楽しみに！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4626i/

星を救え～４人の戦士と１人の王子～

2010年10月26日05時14分発行